
ペットな王子様 番外編集

水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペットな王子様 番外編集

【Nコード】

N6446L

【作者名】

水無月

【あらすじ】

『ペットな王子様』の番外編集です。

本編を読んでからお読みくださると嬉しいですよ。

黒猫王子と弟 1

「ふっふんふん♪」

三連休の一日目の土曜日。

ラウルと一緒に買い物をして家に戻ると、ご機嫌な王子様はへたくそな鼻歌を歌い始めた。

そして、先ほど買った自分の服を楽しげに袋から取り出す。

「よし！これは、明日の水族館に着ていくぞ！」

「そうね。せっかく買ったんだから、それがいいんじゃない？」

「うむ」

私が賛同すると、満足げにうなづくラウル。

家にいる時は自分の和服姿で、一緒に外出するときには弟の服を借りているラウルに、今日は外出着を買ってあげたのだ。

人のものではなく、自分の為だけの洋服がどうやら嬉しかったらしい。

綺麗にたたまれた服を、実に嬉しそうに眺めている。

「とりあえずそれは置いといて、夕飯の支度をするわよ、ラウル。手伝って」

「よかろう。今日ははんばーぐだったな？」

機嫌がいい上に、自分の好物ということもあり、快く食事の手伝いをしようと立ち上がるラウル。リビングにとりあえず置いておいた買い物袋を持つと、キッチンまで運んでいってくれた。

楽しそうなラウルの後姿を見つめながら、微笑が浮かぶ。

明日、それを着て遊びに行ったら、さらにテンションが高いに違いないと、一人くすくす笑いながら私もキッチンへ向かおうとした時だった。

ピンポイント、玄関のチャイムが鳴る。

「はい」

「姉ちゃん、オレ！！」

「へ？」

インターフォンから返ってきた予想外の声に、私は思わず間の抜けた声を出した。

その声が聞こえたのか、くくつと笑う声がインターフォン越しに聞こえてくる。

「へ？じゃなくて。オレだよ、柎。早くあけてよ、姉ちゃん」

「ま、柎！？」

両親と共に海外にいるはずの弟の声に驚いて、声が裏返る。

三人が帰ってくるなんて、まったく聞いていない。

だが、柎がすぐそばに思うと嬉しくなり、何も考えずに玄関の扉を開けに行こうとした時だった。

「どうしたのだ、ヒナタアオイ？」

私の声に何が起こったのかと心配になったのか、キッチンから訝しげな表情で現れたラウルを見て、私ははっと我に返った。

そうだ。ラウルがいた。

魔法の国の王子様なんて、信じる家族ではない。

「ラウル、ごめんっ」

「ぬ？」

突然駆け寄った私に驚いたラウルの唇を無理やり奪う。

と、光に包まれ黒猫の姿になったラウルは、足元で不機嫌そうにみいっと鳴いた。

わけもわからず猫の姿にされ、いい気分のはずはない。

だが、説明している暇もなかった。

「ごめん、ちょっとその姿で我慢してて！」

手を合わせて謝ると、私は慌ててラウルの生活の痕跡を消しに家の中を走り回り、最後にラウルが履いていた靴をしまうと玄関の扉を開けたのだった。

「じゃあ、一人で来たっていうの？」

玄関を開けると一人で立っていた柫をリビングに通し、簡単に話を聞いた私は驚きの声を上げた。

そんな私を見て、柫はティーカップを手にとこりと微笑む。

「やっぱり姉ちゃんのいれてくれた紅茶が一番美味しいな」

「ホント？ありがとうございます！：じゃなくて！！」

私の反応に、柫はたまりかねたようにくくつと笑い出した。

「もう、柫！」

「ごめんごめん。でも、姉ちゃんが元気そうでほっとしたよ」

むっとした私にそう言って、栗色の大きな瞳を細め、優しい笑顔を浮かべる柫。

少し見ないうちに、少し大人びた表情を浮かべるようになった気がする。

「学校が一週間休みでさ。姉ちゃんが一人で淋しがってるかと思って帰ってきたんだ」

父は夏休みでさえまとまった休みがとれず、一人では一日も生活できない父を置いて母が家を空けるわけにもいかないので、家族が向こうに行ってから一度も帰ってきていなかった。

だから、初めての一人暮らしをしている私を柫は心配してくれたのだろう。

「それは嬉しいけど、だからって海外から小学生一人って…」

私ですら一人で海外にいく勇気がなくて向こうに行っていないと言うのに、無事だったからいいものの、途中で何かあったらと思うと表情が曇ってしまう。

と、柫はそんな私を見てぺろつと舌を出した。

「ま、実は日本までは父さんの会社の人が一緒だったんだけどね。出迎えないと、子供一人で飛行機乗れないからさ。成田からはバスに乗って一人できたんだけどね」

「なんだ、そういうこと」

私は納得の声をもらした。空港から自宅までなら一人で来れるくらいいっかりとした子に育てた自信はあった。

柩の説明にようやく事情が飲み込めた私は、ほっと息をつくとき、膝の上にいる黒猫ラウルをなでながら、紅茶を一口飲んだ。

「でも、言ってくれば空港まで迎えに行っただのに」

「それじゃ姉ちゃん驚かないだろ？ サプライズで現れて、姉ちゃんの寂しさ吹き飛ばしてあげようと思ったんだ」

無邪気に微笑む柩に、私は顔がほころんだ。膝の上にラウルがいなければ、抱きしめにいっているところだ。

だが、柩はしばらく私を見つめた後、少しして微笑を浮かべた。「でも、驚いたふりしてくれてるけど、実は母さんばらしちゃったんだろ？」

「へ？」

「またまたしらばっくれて。姉ちゃんいつからそんな演技派になったわけ？」

訳がわからず目を瞬く私に、柩はある物を背後から取り出した。それを見た途端、膝の上の黒い塊が飛ぶ。

「だってこれ、オレのために……うわっ、何だよ、お前」

「フミヤー!!!」

柩が取り出したものに前足を乗せ、威嚇するように声をあげる黒猫ラウル。

その足の下には、さっき隠したはずの買ったばかりのラウルの服があった。

おそらく、私が紅茶を入れている間に発見してしまったのだろう。そして少年用の服を眼にし、自分のものと勘違いしたに違いなかった。

「何？ 遊んでほしいのか??」

「みゃー!!!」

「でも、ちょっと待っててくれよ。オレ今、姉ちゃんと話したいんだ」

「ふみゃー!!」

「あー、ダメだよ。これは遊び道具じゃないんだから。もう少ししたら遊んであげるから、ちょっと大人しく待ってるよ。な？」

これは俺のだと猫語で訴えているに違いないラウルに、笑顔で話しかける榎。

自分のものだのアピールするように洋服をぺしぺしと前足で叩いていたラウルをひょいっと持ち上げ、強引に抱きしめると、暴れるラウルの背を優しく撫で始めた。

最初は抵抗していたラウルだが、榎の邪気のない笑顔に毒気を抜かれたのか、少しして大人しくなり、榎の腕の中でゆっくりと振り返ると半眼で私を見つめた。

猫の姿でも、その瞳で何が言いたいのかひしひしと伝わってくる。

「あのね、榎。実はその服は…」

なんと言って誤解を解こうかと思いつながら口を開くが、榎がそれを止める。

「もういいよ、ごまかさなくても。驚かせられなかったのは残念だけど、姉ちゃんの選んでくれた服、すっげー嬉しいし！」

「いや…あのね…」

「さすが姉ちゃんだよな。オレの好みにぴったりだよ。へへっ。ありがとう」

榎の嬉しそうな笑顔に、私の中でかたりと秤が動いた。

「……そう？喜んでもらえてよかった」

「みゃー!？」

榎の笑顔に陥落した私に、非難めいた鳴き声をあげるラウル。

そして、榎の腕の中から強引に飛び出すと、私の膝の上にしゅたつと凜々しく立った。ぴんっと尻尾をたたせ、私を見上げるラウル。

「…みい」

こういう事だと言いたげに小さく鳴いた黒猫に、私は内心冷や汗をたらしながら笑顔を浮かべる。

「ラウルには、今度買ってあげるね」

心の中で謝りつつそう言うと、ものすごく不服そうな顔になる黒猫。

怒って当然のひどい行為だと自覚はしているが、久々に見る可愛い弟の笑顔には勝てなかった。

ご立腹な王子様に柎の手前、目だけで謝る。

言いたいことはなんとなく伝わったのか、拗ねたように膝の上でまるくなるラウル。

と、柎がくすつと笑いながら口を開いた。

「なんだ、お前も服がほしかったのか？猫のくせに変わった奴だな」
柎の発言に、ぴしりと固まるラウル。

我慢して抑えようとしていた怒りのメーターが上がるのを感じ、私は慌ててラウルを抱き上げた。

「さ、落ち着いたところで夕飯の支度でもしようかな？」

「みい！みゃー！！！」

放せ、放さぬか！！と言っているらしいラウルを抱きしめながら立ち上がると、柎が瞳を輝かせた。

「オレ、手伝う！」

「嬉しいけど、長旅で疲れてるでしょ？今日は休んでいいよ」
本心でもあり、キッチンでラウルと二人になりたい気持ちもあり
そう言うが、柎は笑顔で立ち上がった。

「いいよ、飛行機で寝てたからあんまり疲れてないし。それより、母さんに鍛えられて料理の腕があがったところ、姉ちゃんに見てほしいんだ！」

自信あふれる眼差しを向けられ、断れるはずもない。

「そう？じゃあ、手伝ってもらおうかな」

「うん！今日のメニューは何？？」

楽しそうに私の後をついてくる柎。

実際にだいぶ料理が上手になっていた柎を褒めると、足元の黒猫が『俺の方がうまいぞ！やらせろ！！』と言うように私の足元をペ

しぺし叩くという繰り返しながら夕飯を作り、食事を終えた後、
柁がお風呂に入ったところでようやく私とラウルは二人きりになれ
たのだった。

黒猫王子と弟 2

「全く、一体なんなのだ！」

私の部屋で人間の姿に戻るなり、ラウルは開口一番むっとした表情でそう言った。

「ごめんなさい」

全面的に私が悪いので、素直に頭を下げる。

柎の可愛さに負け、ラウルに酷いことをしたのは重々承知だ。

「あの服は、俺の為に買ったのではなかったのか？」

「はい。すみません」

「夕飯も、二人ではんばーぐを食べて、俺にはミルクだけとは何事だ？」

「申し訳ありません」

「さらにはデザートのしゅーくりーむまで食べおって！」

「本当にごめんなさい…」

反省して項垂れる私。

我に返ると、ラウルには本当に悪いことをしたと思う。楽しみにしていた物を、ラウルは何も悪いことをしていないのに奪ってしまった。責められて当然である。

しゅんとしていると、少しして小さな溜息がラウルの口から漏れた。

「まあ、久しぶりに家族と会って浮かれるのはわかるがな」

顔を上げると笑顔ではないが、少し表情を和らげたラウル。

自分も家族と離れて暮らしているからか、不満は残るものの、どうやら許してくれるらしい。

「ほんとにごめんね、ラウル。服はまた買いにいこ」

「今日の物よりいいものを見つけたのだぞ」

「了解」

「うむ」

言うだけ言ってスッキリしたのか、ようやく口元に笑顔を浮かべるラウル。

だが、ほっとしたのもつかの間、さっさとお風呂から出てきたらしい柫の足音が聞こえ、王子様は再び猫の姿に早変わりせざるをえなかった。

「姉ちゃん！」

柫に続いてお風呂に入ってから部屋に戻ると、自分の部屋にいた柫が枕を手にしてやってきた。

「どうしたの、柫？」

私の膝の上で不服そうに丸くなっている黒猫の背中を撫でながら尋ねると、柫はベッドに腰掛けていた私の隣にすんと腰を下ろす。そして、にっこりと微笑んだ。

「なあ、今日姉ちゃんと一緒に寝ていいだろ？」

「え？」

「……………」

柫の発言に、ぴくりと耳を動かすラウル。どうやら、ラウルは嫌らしい。

「何言ってるの、柫。もう小さい子じゃないんだから、自分の部屋で寝たら？」

「いいじゃん、別に。久しぶりに会ったんだし、それにまたしばらく会えないんだしさ」

「それはそうだけど…。ベッド狭いよ？」

「いいよ。くっついて寝る！」

にこつと無邪気に笑って、私にぴとくっつく柫。

正直言って、もの凄く可愛い。

膝の上に目をやると、半眼で私を見上げている黒猫の姿。断れと目が語っている。

弟に甘くなる私の気持ちはわからなくはないが、寝るときまで邪魔されたくないのだろう。

それは、わかる。

そして、先ほどラウルに悪いことをしたと反省した。
それはそうなのだが…。

「な、姉ちゃん、いいだろ？」

ねだるように小首を傾げながら上目遣いで見つめられ、私の中の
理性がぷちっと壊れ、再び天秤がカタリと傾く。

「しょうがないなあ、柁は」

「みゃ!？」

でれっとした笑みを浮かべた私に、非難めいた黒猫の鳴き声。

「わーい! だから、姉ちゃんって大好き!」

「もー、柁ってば」

抱きついてきた柁の髪を、くしゃくしゃと撫でる。

ブラコンとよく言われるが、否定できないとしみじみ思う。

久しぶりに会えたせいか、よけい可愛くて仕方がない。

たとえ、王子様がものすごく不機嫌そうに睨んでいたとしても、
ちよっぴり心が痛むとしても、目の前の弟の笑顔には敵わなかった。

「じゃ、湯冷めする前に寝よう」

「そうだね」

「……………」

私達の会話を聞き、しっぱをゆらりと動かしながら立ち上がるラ
ウル。

とてとてと歩くと、ベッドのど真ん中で身を丸くして座り込んだ。

「なんだよ、お前も一緒に寝るのか？」

「いつも一緒に寝てるからねー」

ラウルの行動にきょとんとした柁に、微苦笑を浮かべながら答え
る。

ラウルは私達の言葉には反応せず、その場所を動くつもりはない
というように、目を閉じたままだ。

「一緒に寝るのはいいからさ、もうちよっと隅っこ行ってよ」

「……………」

「そこにいたら、姉ちゃんとかくつついて寝れないじゃん」

「……」

本来なら言葉が通じるはずのない猫を説得しようとしているあたり、まだ子供らしくて可愛い。

「なあってば。お前はいつも一緒に寝てるんだろ？ 今日くらいオレに譲れよー」

つつんとつつく柎を無視し、寝たふりをしているラウル。

私が柎の言うことばかり聞くので、意地になっているらしい。

「えーと、ラウル……」

「……」

「ったく、もー」

おずおずと声をかけた私にも無反応だったのを見て、柎は小さく溜息をつく、ラウルを抱き上げようと手を伸ばした。

とたんに、目を開いて半眼で睨むラウル。

柎は目をぱちぱちと瞬きながら、伸ばした手を引っ込める。

「この猫、姉ちゃんに相当なついてるんだな」

「うん。そうみたいだねえ」

「そっか……」

柎はふうっと息をつき、それからにこっとラウルに微笑みかけた。

「しかたないな。姉ちゃんの隣はお前に譲ってやるよ。お前の方が、ちびだしな！」

「みゃっ!？」

「オレの方がお兄ちゃんだから、我慢してやるよ」

「柎、大人になっだねー!」

柎の言葉に、思わずきゅっと抱きしめて頭を撫でる私。

と、そんな私達の前を、黒い物体が通過した。

ベッドの隅まで移動したラウルは、その場で丸くなる。

「あれ？ 気が変わったのかな？」

「そうみたいね」

私は笑いをこらえながらきよとした柎に短く答えた。

どうやらプライドの高い王子様は、柁に子供扱いされたのが不服だったらしい。

自分の方が大人だから譲ってやったのだと言うように、優雅に尻尾を揺らしている。

「譲ってくれてありがと、ラウル」

「みい」

お礼を言って背中を撫でると、当然だと言うようになくラウル。さっきまでの態度はどこへやらだ。

「さ、寝よ、姉ちゃん！」

「はいはい」

電気を消して布団に潜り込むと、ぴとっとくっついてくる柁。へへっと嬉しそうに笑っている。

私はそんな柁の頭を撫でて、目を細めた。

「明日はどうしようか、柁」

「そうだなあ…。蓮は暇かな？ 久しぶりに会いたいな」

「蓮？」

「うん。桜子姉ちゃんは、どうせ忙しいだろうし」

「そうね。桜子はバイトだって言ってた。蓮はどうだろ？」

「みい」

どうせあいつは暇だと言うように、会話に入り込んでくるラウル。普段蓮が来ることを好まないラウルだが、私と私にべったりな柁とで過ごすよりは、蓮がいたほうがいいと思ったのかもしれない。

「明日、電話してみよっか」

「うん。オレ、蓮のマジック見たい！」

きらきらと目を輝かせてそう言った柁を見て、どうか蓮が明日暇でありますようにと願う辺り、私は本当にブラコンかもしれないと思いつつ、すやすやと眠りについた柁とラウルの寝息を聞きながら、私もぐっすりと眠ったのであった。

黒猫王子と弟 3

翌日。午前中にお誘いの電話をすると、蓮は快く誘いに乗ってくれた。

一緒に家でランチをすることになり、蓮がやってきたのはお昼になってから。

笑顔で現れた蓮の手には、私の好きなケーキ屋さんの箱がぶら下がっていた。

「ごめんね、蓮。急に誘ったりして」

「いや、別にいいよ。俺も久しぶりに桎に会いたかったし。はい、これ土産」

「ありがとう！」

私にケーキの箱を渡すと、リビングから覗いている桎に手を挙げて挨拶しながら、靴を脱いで家に上がる蓮。

並んでリビングに向かおうとした私に、桎に聞こえないような小さな声で囁いた。

「ラウルの分もあるから、桎に気付かれないように食わせてやって」「ありがとう」

なんだかんだ言って甥っ子想いな蓮に、思わず笑みが浮かぶ。リビングにはいると、待ちかねたように蓮に抱きつく桎。

「蓮、ひっさしっぶりー!!」

「おう、桎。ちょっと背―伸びたか？」

久しぶりの再会を喜ぶ二人を見ながら紅茶をいれてから、私はソファに腰を下ろした。そして、ソファの上で丸くなっていた黒猫を抱き上げて膝の上にのせる。

「蓮がラウルにもケーキ買ってきてくれたよ」

「……………」

桎に聞こえないように小声でそう言うと、ラウルは返事の代わりにゆらりと尻尾を揺らした。一応、喜んでいいるらしい。

「後でこっそり食べようね」

「：みい」

今度は私をちらりと見上げながら、問うように小さく鳴くラウル。どうやら『もちろん人の姿でだろうな?』と尋ねているようだ。確かに、猫の姿で食べるのでは嬉しさも美味しさも半減だろう。

「今日は大丈夫だよ。蓮がいてくれるからね」

蓮のことだから、事情を察してくれているだろうし、ラウルがゆつくりご飯を食べられるくらいの時間はつくってくれるに違いない。

「ねーちゃん。蓮も来たし、ご飯用意しよー!」

蓮との再会を喜んでいた柎は、落ち着いたのか笑顔でそう言った。自分も一緒にやる気満々のようだが、それではこちらが困る。

「そうだね。でも、私一人で用意するから、柎は蓮と遊んでて」

今日のお昼はカレーライス。朝からこれを準備したのは、四人前作ってもわからないからだ。だが、一緒に用意されては、またラウルの昼食がミルクになってしまう。

「えー。サラダはこれから作るんだろ?俺の作ったの蓮に食べさせたい!」

やたら蓮になついている柎の発言にどうしようかと悩んでいると、蓮が笑顔で口を開いた。

「お前は女の子かよ。いいから、ひまわりに任せてゲームでもしてようぜ。俺らは、後で片づけ担当な」

「蓮も一緒に片づけてくれんの?」

「もちろん。ひまわりが作ってくれるんだから、男二人で後片づけ。男の約束な」

「わかった!」

蓮に向かって元気よく答える柎。

相変わらず、蓮はお子様の扱いが上手だ。

「じゃ、ちょっと待っててね」

蓮にありがとうと言うように目を細めてそう言うと、任せとけと言うように小さく頷いた。

マジック見せてーと楽しそうにせがむ柁を見ながら、私はリビングを出てキッチンへ向かった。

トコトコと、黒猫も後を付いてくる。

キッチンへ入りエプロンをつけていると、足下をペシペシと肉球で叩く黒猫。

足下に視線を向けると、よほど訴えたいことがあるのか、後ろ足で器用に立ちながら私の足を叩いてアピールしている。

「何、ラウル？」

「みゃあ！」

「えーと、人の姿に戻りたいわけ？」

「みい！」

そうだと言うように返事をしたラウルは足を叩くのを止め、きちんと座ると、さあキスをしろと言わんばかりに顔を上に向けたまま目を閉じた。

リビングからは蓮と柁の楽しげな声が聞こえてきているし、あちらからはここは見えない。

蓮がいるなら大丈夫かと思い、私はしゃがんで身をかがめると、キスを待っている黒猫の額にそっと唇を寄せた。

光に包まれ、黒猫から可愛らしい少年の姿に戻るラウル。

にやっと不敵に笑うと、自分用のエプロンを引っぱり出して身につけ始める。

「ラウル、手伝ってくれるの？」

「うむ。俺の方が料理が上手いとわからせてやる！」

どうやら、昨夜、黒猫ラウルの前で柁の料理の腕を褒めたことを気にしていたらしい。

負けず嫌いの王子様は、同じ年頃の柁と張り合う気ようだった。

「はいはい。じゃあ、お手伝いよろしくね」

「任せろ！！」

腕まくりをし、やる気満々のラウルは、私の足を引っ張ることなく料理を手伝ってくれた。

確かに、はじめの頃と比べると、かなり料理の腕は上がったと思う。

だいぶまともな料理が作れるようになっていた。

「ふふ。どうだ、ヒナタアオイ!!」

「お。綺麗な盛りつけだね」

「俺がやったのだから当然だ!」

頼んだサラダの盛りつけを褒めると、ふふんと勝ち誇った笑みを浮かべるラウル。

実際、料理の腕は桎の方が上だが、一生懸命頑張っているラウルは褒めて伸ばしてあげたかった。

「ラウルは私の部屋で一人で食べてもらっていい?」

カレーとスープを温めなおし、お皿によそったところでそう尋ねると、ちよつと悩むラウル。

少しして、大きな瞳で上目遣いに私を見つめる。

「一人で食べるのは、美味しくないのだがな」

「どうやら、遠回しに一緒に食べたいと言っているようだ。」

「うーん。冷めちゃうともっと美味しくないけど…、待っててくれたら蓮達が後片づけしてる間に部屋に行くけど?」

「うむ。ではそれでよい」

「わかった。じゃ、それまではとりあえずさっきの姿ね」

「仕方ないのう」

小さく溜息をつく、少し背伸びをして私にそつとキスをするラウル。

黒猫に戻ったラウルの背中を一撫でしてから、私はラウルのぶんの昼食にラップをかけ、こっそり部屋に持っていくと、二人の待つリビングへ料理を運んだのだった。

「ねーちゃんの料理はやっぱ美味しいよな!」

「ほんと、ひまわりは料理上手だよな」

「みい！」

料理を食べながら褒めてくれた二人に、何故か返事をしたのはラウル。

それは俺の実力だと言っているらしい。

「ありがと」

作った側としては、美味しそうに食べてくれるのが一番嬉しい。いい食べっぷりの男の子二人を見ながら、私も楽しく早めに食事を切り上げる。

ラウルのご飯を温め尚して上げるのは無理っぽいので、なるべく早く食べさせてあげたかった。

それに気付いたのか、食後もそのままおしゃべりを続けていた柎の頭に、ぽんっと手をのせる蓮。

「柎。先に後片づけしてからゆっくり話そうぜ。デザートも、その時な」

「うん。わかった。姉ちゃん、ちょっと待ってて」

そう言って立ち上がると、テーブルに置かれていた食器を片づけ始める柎と蓮。

「二人とも、ありがと」

「いえいえ。ごちそうになったんだから、これくらいしないかね」

そう言って、ごゆっくりと目配せをしながら柎を促してキッチンへ行く蓮。

本当に、頼りになる。

「さ、ラウル、行こ！」

「みゃ！」

二人がいなくなり、意気揚々と二階へ向かうラウル。

柎に気付かれないように私の部屋にはいると、再び王子様の姿に戻してあげた。

「蓮もたまには役にたつな」

「たまにって…。結構力になってくれると思うけど？」

私の言葉は軽くスルーし、お皿にかけられていたラップをはずすラウル。

冷めたままで申し訳ないと思っていると、ラウルは綺麗な指でお皿の上に何かを描いた。ふわりとカレーライスとスープが光に包まれる。

とたんに、二つのお皿から湯気が立ち上った。

「これならば、美味しいであろう？」

驚いてぼかんとしている私にそう言って微笑むと、食事を始めるラウル。

すっかり忘れていたが、そう言えば目の前にいる少年は魔法使いだった。

色々と事情があって魔法が使いづらくなっているらしいが、食事を温めなおすくらいはお手の物だろう。

実に便利だ。

「美味しい？」

「うむ」

朝食もまともな物を食べさせてあげられなかった事もあるからか、勢いよく平らげていく王子様。

柎と負けず劣らず、その姿は可愛い。

「ごめんね、ラウル」

目を細めてラウルを見つめながら、思わずそう言葉がこぼれた。

「何がだ？」

手を止めて首を傾げるラウルに、微苦笑を向ける。

「柎中心になっちゃって」

「別にいい」

私の言葉に、ふふんと不敵な笑みを浮かべるラウル。

そして、勝ち誇ったように口を開いた。

「ヒナタアオイの弟と言うことは、俺の弟と同然だ。兄として、讓つてやるのは当然だろう。俺の方が大人だからな！」

「…そうだね」

思わず笑いそうになるのを堪えて、短くそう答える。

昨夜、柁にちびっ子扱いされたのを、相当気にしていたらしい。

ラウルらしいなーと思いながら、私はラウルの食事が終わるのを笑顔で待っていたのだった。

黒猫王子と弟 4

食後、私はソファに座りながら、蓮に遊んでもらっている柁目を細めて眺めていた。

ラウルはまともなご飯を食べてお腹がいっぱいになったからか、黒猫の姿に戻された後も機嫌よく、今は私の膝の上で丸くなってお昼寝をしていた。

「あー、もうっ。また負けたー！」

「ふっふっふ。まだまだだな柁」

お兄ちゃんと弟という雰囲気よりは、むしろ同年代の友達のように遊んでいる二人。もちろん蓮が柁にあわせてくれているのだろうが、見ていて微笑ましい。

「ねーちゃん、交代！蓮にリベンジしてよー」

「うーん。蓮はゲーム強いからなー。リベンジは無理だと思うよ？」

ソファまでやってきて私の手をとる柁に、苦笑いを浮かべる私。

勝ち負け以前に、立ち上がるとせっかく心地よく眠っているラウルを起こしてしまいそうで、できればこのままできてあげたかった。だが、やんわりと断る私の意図は、柁には伝わらなかったらしい。

「いいから、姉ちゃん。ほら、一緒に遊ぼーよ！」

どうやら私が一緒に遊んでいないのが気になっていたらしく、強引に自分たちのもとへ連れて行こうと、両手で私の手をひっぱる柁。気を使ってくれるのは嬉しいが、昨日はぐっすり眠れなかったらしいラウルの睡眠を、蓮がいる今くらいは確保してあげたかった。

だがその時、どうしようと思っていた私の膝の上で、もぞっと黒猫が動いた。

美しい緑色の瞳を開けると、ゆっくりと立ち上がり思い切り伸びをする。

「ラウル、起こしちゃってごめ……」

話し声で起こしてしまったと謝ろうとした私だったが、膝の上か

ら軽やかに飛び降り、ラウルの向かった先を見て、言葉が途切れる。柎と蓮の視線をあびながら、黒猫ラウルが向かったのはゲーム機のコントローラーの前。

そしてその前にちょこんと座ると、小さな肉球で器用にゲームの開始ボタンを押した。

「みい！」

かかってこいと言わんばかりに、もう一つのコントローラーを握っている蓮を見上げ、可愛いらしい声でなく黒猫。

どうやらリベンジ不可能な私の代わりに、自分が蓮を倒すつもりらしい。

私の手を握りながら、柎はぽかんとゲーム好きの子猫を見つめている。

「えーと…」

「みゃー！」

困惑の声をあげながらちらりと私に視線を送る蓮の横で、前足で器用にボタンを連打しながらゲームをするラウル。

信じられないものを見るようにぱちぱちと目を瞬いている柎の肩に、私はぽんっと手を置いた。

「あーやって、一緒に遊んでるつもりなのよ。私のやること、すぐに真似したがるの。可愛いでしょ？」

「そっか。びっくりした。って、でもなんか、ちゃんとゲームしてるっぽいけど…」

「偶然よ、偶然。じゃ、せっかくだから私がゲームしようかな」

ラウルが普通の猫ではないと疑っているような柎に、誤魔化すように笑顔を浮かべる私。

さすがに肉球ではうまくボタンを押し切れず、人の姿の時よりは下手なラウルだが、あまり続けさせると猫がゲームのやり方を理解している事がばれてしまいそうだった。

不思議そうな顔をしている柎の手を引きテレビの前まで行くと、ゲームに熱中しているラウルの横に座る。

「さ、ラウル。こうたーい！」

「みい!？」

強引に膝の上に抱き上げると、不服そうな鳴き声をあげる黒猫。四肢を伸ばして抵抗している。

「ゲームはまた今度ね、ラウル。今は私がやるから」

「：みい」

お前の代わりにやってやっているのに：と言うように半眼で睨むラウル。

お詫びのつもりで背中を撫でると、諦めたように瞳を閉じた。

「へえ。すごいなついてるんだなあ」

私の膝の上で再び大人しくなったラウルに、感心した声をあげる
杢。

手を伸ばしてその背中を撫でると、ラウルはぴくっと身体を揺らし、イライラしたように尻尾を揺らした。

自分の方が大人だと思って我慢はしているものの、昼食の時以外ずっと猫姿で好きなことも出来ずにいるのは、やはりストレスがたまってしまうらしい。

そんなラウルを見て、微苦笑を浮かべたのは蓮だった。

「ひまわり。このゲーム終わったら、夕飯の買い物でも行ってくれ
ば？俺が杢と遊んでるからさ」

ちらりとラウルを見ながら、笑顔でそう提案する蓮。

ラウルがイライラしているのを悟って、気分転換に二人で出かけてくればと言ってくれているのだろう。ラウルもそれに気づいてか、今度は嬉しそうに尻尾を揺らしている。

ありがたい申し出を笑顔でうけようとした私だったが、その前に杢のほうが口を開いた。

「何言っただよ、蓮。買い物行くなら、荷物持ちに男が行かなきゃだめだろー。女のねーちゃんに重い荷物もたせるのかよ」

「えっと…」

まともな反論をされ、苦笑を浮かべる蓮。

叱るような眼差しで、柩に返す言葉が見つからないうちに、柩は私に向かって笑顔を向けた。

「いつも大変なんだろうから、男の俺がいる時くらいは、俺が荷物もちしてあげるからな、ねーちゃん！」

「あ、ありがとうー、柩」

蓮の気遣いが、瞬時にして水泡に帰す。

ラウルには申し訳ないが、柩のいる間はやはり我慢してもらえないようだ。

柩の相手を思いやれる成長を嬉しく思いながら、私は残念そうに尻尾をだらんとたらしめたラウルの背を、優しく撫でたのだった。

黒猫王子と弟 5

夕飯の買い物に出掛けたのは、結局夕方になってからだった。

用事があるからと帰る蓮を送るついでに、三人と一匹で家を出る。右手で黒猫を抱いた私の隣に柁。その反対側に蓮。

柁を中心に三人仲良く手を繋いで歩いていると、嬉しそうにここに微笑んでいた柁が口を開いた。

「こうしてるとき、オレ達って若い夫婦と子供に見えるかもね」
「んな!？」

柁の発言に、顔を赤らめて妙な声をあげる蓮。

腕の中のラウルが呆れたように半眼になる。

「そんなわけないでしょ、柁。いくらなんでも、柁くらいの子供がいるように見えるわけじゃない」

「そうかもしれないけどさー、なんか家族っぽいじゃん。なあ、蓮!」

「なあと俺に言われても…」

「オレ、蓮なら兄ちゃんになってくれてもいいんだけどな!」
「うえ!？」

にこやかな柁の言葉に、蓮は再びおかしな声を発している。

黒猫はまたもや何か不服だったのか、今度は私の腕からもそもと抜け出すと、器用に私の肩、柁の頭をひよいひょいと飛び、蓮の頭へ着地をした。

そして、ぴんつと背中を伸ばして勝ち誇ったように座っている。どうやら、兄になるのは蓮ではなくこの俺だとアピールしているようだ。

「なーに言ってるの、柁。蓮も困ってるじゃない」
ラウルを見ながらくすつと笑うと、柁はいたってまじめな顔で私を見上げた。

「でもさ、姉ちゃんって男を見る目がないじゃん? だから、蓮みた

いなのがそばにいてくれる方が、オレは安心なだけだな。お勧めだよ、蓮は」

「ご心配ありがとう…って、男を見る目がないって何っ!？」

柫に恋愛話などしたことがないはずなのにそんなことを言われ、思わずつつこむ。

と、柫はくくつと笑った。

「桜子姉ちゃんが、姉ちゃんの最大の欠点はそれだってさ。オレも、何となくわかるし」

「ええ!？」

「それは俺も同意見だな」

「みい」

蓮とその頭の上にいるラウルにまで同意され、言葉を失う私。自分でも薄々自覚しているが、みんなに言われるとさすがにへこむ。

「わかってるけどさー、しょうがないじゃない…」

自分からすると、いい人だと思って好きになっているのだ。

別に、悪い男が好きなのではない。

「だから、蓮がお勧めだって。蓮なら人畜無害な感じで安心して任せられるし」

「あのねえ、柫。私も蓮にも選ぶ権利があるのよ？」

「みい!」

今度は私に賛同するようになくラウル。

蓮の頭の上から私の肩の上へと戻ってくると、俺がいるではないかと言わんばかりに凜々しい顔つきで柫を見つめる。

だが、柫がそんなラウルのアピールに気付くはずはなく、複雑な表情を浮かべている蓮の方に視線を向けた。

「なあ、蓮はもちろんいいだろ？」

「え? あ、いや、俺は…」

ストレートな柫の問いに、顔を赤くしてうろたえる蓮。

この手の話で冗談を言うのは苦手なタイプだ。

「そんな聞き方したら、蓮が返事に困るでしょ、柁」

「えー、でもさー蓮と姉ちゃん仲いいじゃん！」

「友達と恋人は話が違うの。ねえ、蓮？」

「あーうん。そうだよなー。はははー」

蓮は乾いた笑いをする、信号待ちで立ち止まった柁の手を放した。そして、申し訳なさそうに柁を見つめる。

「んじゃ、悪いけど今日はこの辺で帰るな」

「えー、一緒に買い物は？」

「悪い。柁が帰るまでにはまた遊びに行くからさ」

「わかった。約束な！」

「おう」

笑顔で柁の頭をくしゃつと撫でると、私には微妙な微笑みを浮かべる蓮。

「じゃ、ひまわりもまたな」

「うん。今日はありがとう」

「…みゃあ」

小走りに去っていく蓮を見つめながら、腕の中に戻ったラウルが呆れたような鳴き声をあげた。

よくわからないが、逃げたとでも言っているのだろうか。

蓮の背中が見えなくなるまで見ていると信号が変わり、柁と手を繋いだまま道を渡った後、その先にある公園の前を通りかかったとき、ぴくっと柁が何かに反応した。

視線が公園の中に向けられている。

「どうしたの、柁？」

「智くんたちがいたから…」

柁がじっと見つめる広い公園の中には、柁と同じ年頃の子供達が走り回っている。

転校する前は、柁もここで同じようにあの輪の中で遊んでいた。

「行ってきたら、柁。その間に買い物行ってくるよ」

一緒に遊びたそうな榎にそう言うと、榎は困ったように眉を八字にする。

「だめだよ。オレ、姉ちゃんの荷物持ちにきたんだもん。ここで遊んで待ってたら意味ないじゃん」

どうやら榎は、遊びたい気持ちと、男として姉を手伝いたい気持ちで葛藤してるようだった。

家族を思いやれる優しい子に育ってくれてよかったと親ばか的な気持ちで私は微笑むと、榎の背中をとんと押した。

「じゃ、待ってるから遊んでおいで。簡単に作れる物にすれば、遊んでから買い物に行っても夕飯遅くならないし。私はそのベンチで待ってるから」

「ほんと!？」

「うん。行っておいで」

嬉しそうに微笑んだ榎は、友達の方に走っていくと、すぐにその輪の中で遊びはじめた。

蓮と遊んでいた時も楽しそうだったが、やはり同年代の友達と遊んでいる方が子供らしくて可愛い。

私はラウルを膝の上にのせてその背を撫でつつ、ベンチからそんなほえましい光景を眺めていた。

そして、そのまま少しの時間が流れた。

「...？」

突然背後に気配を感じ、私は振り返った。

すぐ後ろに立っていたのは、いかにも軽そうで少々がらの悪そうな少し年上の男性三人。

にやにやしながら、二人が私の左右に腰を下ろす。

反射的にラウルを抱き上げ、立ち上がって逃げようとしたが、あいていた腕をはしっと捕まれた。

「逃げなくてもいいじゃん、お姉さん」

嫌な笑みを浮かべながら、私の腕をつかんでいる男性が話しかけてくる。

手をふりほどこうとしたが、しつかりと握られていてそれは敵わなかった。

「そうそう、暇だからこんな所に一人でいるんでしょー？」

「オレ達と遊ぼうよ」

「弟を待っているだけです。放して下さい」

にやにやしながら取り囲む男性達に、きっぱりと言い放つ。

だが、彼らはひゅうつとばかにしたような口笛を吹いただけだった。

「いいねえ。気の強い子、オレ大好き」

「いいじゃん。弟なんてほつといてさ、オレ達と一緒にの方が楽しいよ？」

「楽しいところ連れて行ってあげるからさあ」

「ちよつと…」

抵抗してみるが、三人にどんどん公園の入口の方に連れて行かれさすがに焦りはじめる。

公園の外には彼らの物らしきワンボックスカー。

あれに乗せられてしまったら、洒落にならない。

周囲に視線をはしらせたが、公園内にいる大人たちも、道行く人たちも見て見ぬ振りをしていて、助けてくれそうな人はいなかった。つうつと冷や汗が流れ落ちたとき、腕の中でずっと威嚇するよう低い鳴き声をあげていた黒猫が、ひゅつと飛び出した。

そして、私の肩をとんと蹴って宙に舞うと、一人の男性の顔をしゃつとひっかく。

「いってえ！」

頬からじわりと血を滲ませた男性は、軽やかに地面に着地し、怒りの表情で彼らを見上げる黒猫を睨んだ。

そんな男性を、ふうつと威嚇しながら睨み返すラウル。

蹴り上げようとした男性の足をかわずと、今度はその足にかぷりと噛みついた。

「このやろっ！」

「おいおい。子猫相手に何やってんだよ…ってえ」

バカにしたように笑った男性もラウルにひっかかれ、顔をしかめた。

小さな身体で必死に私を守ろうとしてくれる黒猫に、徐々に意識が移っていく男性達。

私を捉えていた手を放し、攻撃してきたラウルを捕らえようとはじめる。

「みい！！」

そんな彼らの手をよけながら、私を見て逃げろと言うようになく
ラウル。

さすがに公衆の面前では人の姿に戻れないとわかっているのだから。
う。

小さな身体のまま、私を助けようと全力を尽くしている。

だが、手を放されたからといってラウルを置いて逃げるわけにも
いかなかった。

青年三人の攻撃をいつまでもよけられるはずがない。

子猫だからといって、手加減するような相手にも見えない。

私が逃げてしまったら、ラウルの身が危ないことは分かりきった
ことだった。

「ちよっと…」

「オレの姉ちゃんになにしてんだよっ！！」

「！？」

青年達を止めようと声をあげかけた私の横を通り過ぎ、榎が青年
の一人に体当たりをしたのを見て、私は思わず息をのんだ。

まだ小柄な榎の体当たりでは男性を倒せる筈もなく、ぶつかった
男性は顔をしかめて振り向いただけだった。

だが、榎は怯むことなく、守るように私の前に立ちはだかる。

「それにあんたたち、いい年して子猫いじめてはずかしいのか
？！」

「何だと、ガキ？」

ラウルへの攻撃をやめて、柎の前に睨みをきかせながら並ぶ三人。柎はきゅっと唇を噛みながらも、逃げようとはしなかった。

「大人にそんな口きいていいと思ってるのか？」

そう言いながら、柎に手を伸ばしてくる青年。

私が反射的に柎を抱きしめて守ろうと、腕を伸ばしたときだった。彼らを睨んだまま、ポケットから何かを取り出し、その紐を引っ張る柎。

とたんに、けたたましい音が辺りに鳴り響く。

「なっ!？」

「この人達、変質者ですー! 誰か警察に通報してくださいー!!」
「防犯ブザーと子供の叫びに、先ほどもでは見ぬ振りしていた周囲にいた大人達が遠巻きに集まりはじめた。中には本当に携帯をとりだし、警察に連絡しようとしている人までいる。」

さすがにこの状況はまずいと思ったのか、ちっと舌打ちすると、小走りに公園を去っていく三人。

車に乗ってこの場を去るのを確認してから、柎は防犯ブザーの音を切った。

そして、周りに集まった大人達にぺこりと頭を下げる。

「すいません。お騒がせしました。でも、おかげで助かりました」

「あ、すみませんでした」

私も慌てて頭を下げると、周囲の人たちは去っていった。

「…はあ」

ほっとして、思わずその場にしゃがみこむ私。

柎が腰をかがめ、心配そうに私を見つめる。

「大丈夫、姉ちゃん？」

「うん。柎とラウルが守ってくれたから」

幸い全ての攻撃をよけきったラウルが気遣うように足下にすりよってきたので、微笑みながらその背中を撫でる。

と、視線を落としてはじめて、柎の足が小刻みに震えているのに気付いた。

「榎…」

「よかった。姉ちゃん無事で」

怖くなかったはずはない。だが、それを見せないように微笑む榎を、私は立ち上がるときゅっと抱きしめた。

「ちょ、姉ちゃん…」

「ありがと、榎」

「うん」

腕の中で、ホッとしたように息をつく榎。

そんな私達の足下をくるとまわったラウルは、片手でぺしつと榎の足を叩くと、よくやったというように、短く鳴いたのだった。

黒猫王子と弟 6

夜。蓮にたくさん遊んで貰ったからか、夕方の一件で精神的に疲れたのか、柩は私がお風呂から出てくるのを待ちきれず、自分の部屋ですやすやと眠りについていた。

おかげでラウルは人の姿でゆっくりと入浴でき、機嫌がいい。

「あいつもなかなかやるな」

ずっと猫の姿にさせているお詫びに髪を乾かしてあげていると、ラウルは口元に笑みを浮かべてそう言った。

「まだ子供なのに、なかなか勇気がある。オレの弟になるのにふさわしいな」

「年齢変わらないと思うんだけど」

ぼそっとつっこんだ私の言葉はドライヤーの音にかき消され、ラウルの耳には届かなかったようだ。

録画しておいたラウルのお気に入りテレビ番組を見ながら、へたくそな鼻歌を歌っている。

そんなラウルを見て、私は目を細めた。

夕方の一件以来、二人は互いを気に入ったようだった。

家に帰ってきてからは、柩はずっとラウルを抱いたまま褒めちぎっていたし、黒猫はその腕に大人しくおさまって満足そうに喉をならしていた。

協力して私を守ったことで、友情らしきものが生まれたのかもしれない。

「はい、終わり」

ドライヤーを止めると、ラウルは振り返って口元に笑みを浮かべた。

「うむ。ありがとう」

「どういたしまして」

お礼をちゃんと言えるようになったラウルの頭をなでると、私は立ち上がってドライヤーを戻しに行った。

その後を、何故かそこついてくるラウル。

「何、ラウル？」

振り返って尋ねると、ラウルは私をじっと見つめながら口を開いた。

「いっそのこと、あやつの前で人の姿になるのはどうだ？」

「無理」

「むう…」

即答した私に、不服そうな声を漏らすラウル。

ぷうっと膨れ、半眼になる。

「何故だ。いいではないか。弟になるのだから、いずれはわかることであろう？」

「いや、弟になるとも限らないし」

「人の姿ならば、ゲームも一緒にできるではないか」

私の返答にさらにふてくされた表情のラウルの言葉に、私は思わずくすつと笑う。

それに、唇を尖らせるラウル。

「何を笑う！」

「いやいや、微笑ましいなと思って」

「ぬ？」

私が笑った理由がわからなかったのか、眉をひそめるラウル。

「さ、そろそろ寝るよー」

私はドライヤーを片づけると、ラウルの背中を押して部屋に向かわせる。

話をそらされてむっとしているが、ラウルは素直に歩き始めた。

「何故ダメなのだ」

まだ引き下がらないラウルに、私は苦笑を浮かべた。

「うっかり杢が両親に話しちゃったら、杢も私も心配されて、あつ

ちに連れてかれちゃうわよ」

いくらしっかりしてるとは言っても、柁はまだ子供だ。

ラウルの正体はむしろ私より素直に受け入れそうだが、口止めたとしても、あまりにファンタジーな出来事についてうっかり口を滑らせる可能性は高い。

両親の耳にそんな話が入ったら、急に子供じみたことを言い始めた柁もどうしたのかと心配されるし、私も一人暮らしの寂しさでおかしくなったと思われかねない。

「むう…。それは困るな」

「でしょ？ だから柁と遊ぶのは猫の姿で我慢してね」

「むう…」

そのままラウルは、諦めたように黙って部屋に戻った。

ちよっぴり可哀想だが、こればかりは仕方がない。

柁の事を気に入ったラウルは、人の姿で柁と遊んでみたかったのだろう。

こっちの世界に来てからは同年代の子と会う機会などなかったから、興味を持ってくれたならできれば遊ばせてあげたかったが…。

「あ、そっか」

「ぬ？」

ふと思いつき声を漏らすと、ラウルはベッドに腰掛けながら私を見上げた。

そして、小首を傾げる。

「なんだ、ヒナタアオイ？」

「いや、柁と遊ぶだけなら方法はあったなーと思って」

「どんなだ？」

少し嬉しそうに目を輝かせるラウル。

どうやらかなり柁と遊びたかったらしい。

私はくすつと笑うと、ラウルの隣に腰を下ろした。

「またちよつと、蓮に協力してもらえばいいのよ」

「む？」

「蓮の甥っ子として紹介すればいいのよ。それは事実なわけだし。猫が実は人間だったって事がわからなければ問題ないんだもん。緑色の瞳はちょっと問題かもだけど、瞳の色くらい変えられるでしょ？」

「うむ。それくらいの魔法なら容易いぞ」

ぱあっと嬉しそうな表情になるラウル。

こんな顔は、年相応に子供らしくて可愛い。

「もちろん、魔法が使えるとか王子様だとか、そんな話はしちゃだめだからね？」

「まかせろ。こちらの世界の人間のふりをすればよいのだろうか？俺に出来ぬことはない！」

ふふんっと自信ありげに微笑むラウル。

だが、調子に乗るとうっかり話してしまいそうで少々心配だった。まあ、そこは一緒にいてフォローすればいいだろう。

そうすれば、明日一日ラウルは人の姿で過ごせるし、子供同士で遊べて楽しめるはずだ。

「んじゃ、蓮にお願いしよっか。予定があってこれないとしても、口裏あわせしてもらわなきゃだしね」

「うむ」

機嫌よく微笑むラウル。

蓮から協力OKのメールが帰ってくると、率先して猫の姿に戻り、明日に備えてベッドの中で丸くなったのだった。

黒猫王子と弟 7

「おっす」

「いらっしやい」

翌日、昼前にやってきてくれた蓮を、私は笑顔で出迎えた。

蓮の後ろには、朝からうちを抜け出して蓮の所へ行っていたラウルの姿。

魔法で瞳を黒く見せ、こっそり借りていった柩の服から、蓮に買ってもらったらしい服に着替えている。これなら、普通の子供に見えるくない。

「ありがとね、蓮」

「いやいや、もともと俺の身内がひまわりに迷惑かけてるわけだし、気にすんなよ」

こそつと言った私に、こそつと言いつ返す蓮。

ラウルには聞こえなかったようで、何を言ったか気になる素振りを見せたものの、それよりも柩の事が気になるらしく、ラウルの視線はリビングの入口へ向けられていた。

「柩ー！」

「はい」

名前を呼ぶと元気な返事と共にリビングから現れる柩。

蓮を見ると嬉しそうな顔をしたものの、視線はきよろきよと落ち着きがなかった。

「どうしたの、柩？」

「朝からラウルが見あたらないんだよ」

「俺なら、もがっ」

柩の心配そうな表情に思わず口を開いたラウルだったが、蓮が素早くその口をふさいだ。

私は誤魔化すように、柩に笑顔を向ける。

「きっと散歩に行ってるのよ。いつもの事だから心配ないって」

「そっかー」

残念そうに呟いた柁はラウルの存在に気付き、気を取り直したようににこっと笑った。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

言い慣れないからか、ぎこちなく挨拶を仕返したラウルに思わず微笑みそうになるのを堪えながら、私は蓮に視線を向けた。それを受け、口を開く蓮。

「柁、こいつは俺の姉ちゃんの息子で、釈しゃく 朔夜さくや。柁と同じ年。遊びに来たのはいいけど俺も両親も用がでちゃってさ。話は聞いていると思うけど、夕方まで一緒に遊んでやってくれよな」

「うん。わかった！いこ、朔夜くん」

「うむ」

柁に誘われ、嬉しそうに返事をしたラウルだったが、その返事のしかたに柁はきよんとした。

確かに、普通のお子様は『うむ』などと返事しないだろう。というか、私はすっかりなれてしまっただけで違和感がなくなっていたが、つつこみどころ満載な話し方だ。数時間の間に、蓮に矯正されているはずもない。

「えーと…」

「柁」

どうしようかと考える私の隣で、柁を呼び寄せる蓮。

「朔夜は今、漫画の影響で殿様言葉にはまってるんだ。何もつつこまず、そのままつきあってやってくれるか？」

「うん。わかった」

耳元でそっと告げた蓮に、こくりと頷く柁。

再びラウルに笑顔を向けると、二人でリビングに入ってしまった。

何やらゲームをはじめようというらしい二人の会話を聞きながら、私は蓮に向き直った。

「蓮、ナイスフォロー」

「まあ、不思議がられると思ってたし」

苦笑いを浮かべる蓮だが、ラウルの扱い方はさすがだなーと思う。今日の段取りもほぼ蓮が考えてくれたし、それに…。

「ラウルの偽名、蓮が考えてくれたの？えーと、釈夜だっけ？」

さらりと紹介した初耳なラウルの和名にこっそり驚いていたので尋ねたものの、蓮はどこか遠い目をする。

「え、何？」

「いや、思いつかなかったから、昔変人王子が使ってた偽名を借用しただけなんだけどな」

「あー、そうなんだ？」

なんでピオニーさんがそんな名前を使っていたのかつつこみたかったが、どうやらいい思い出ではないらしい蓮に、それ以上尋ねることは出来なかった。

そして、用がある蓮が去っていくのを見送ってから、リビングに戻る。

二人はすでにうち解けて、ゲームを楽しんでいるようだった。

「いっけえ！」

「ぬう！？だが、それくらいでは負けはせんぞ！」

「おお！？そうくるんだ」

二人でゲーム画面を見ながら騒いでいる様は、普通の小学生と変わらない。

こちらの世界の同じ年頃の子供と遊ぶのは、ラウルにとってはいい経験だろう。

できればテレビゲーム以外で遊んでくれた方がいいが、最初は互いに知っているゲームが打ち解けやすいのかもしれない。

慣れたら外で遊ばせようと母親めいた気持ちになりながら、私は二人にミルクティーをいれ、ランチの準備をしにそっとキッチンへ移動した。

二人の楽しそうな声をBGMに、朝から仕込んでいた生地を伸ば

し、具を盛り付け、オーブンでピザを焼き始める。その間にスープとサラダを作りはじめた。

少しして、ふと背後に気配がして振り向くと、そこにはひよこつと顔を出してキッチンを覗いているラウルと柗がいた。

「姉ちゃん、手伝うよ!」

「うむ。何かすることはないか?」

どうやら、いい匂いにつられて、ゲームを中断して手伝いに来てくれたらしい。

我ながら、いいしつけをしたと思ったりする。

「二人ともありがと。じゃあ、柗はサラダのお皿を用意してくれる?あと、ラウ:」

うっかりラウルと呼びそうになり、はっとする。

「らう?」

言葉を途中で途切らせた私を不思議そうに見て、最後の言葉を繰り返す柗。

私は平静を装いながら、どう誤魔化そうか頭を回転させた。

「らうランチの準備にあと必要なのはー、フォークとかスプーンとかかな?朔夜くん、そこにあるの、テーブルに並べてきてくれると嬉しいなー!」

無理やり妙な発音のランチで誤魔化すと、私はラウルに笑顔を向けた。

「うむ。よからう」

私が必死だったのがわかったのか、笑いを含んだ瞳で答えるラウル。

柗も少々不審そうな顔で私を見たものの、手伝いを始めたラウルにつられるように、自分に与えられた仕事を始めた。

内心ほっとしつつも、気を引き締める私。

ラウルがぼろを出さないかと心配だったが、人の事を心配している場合ではなかった。

慣れとは恐ろしいもので、ついいつものように接してしまいそう

になる。

他人のふりは意外と難しいようだった。

その後も、私もラウルも時々ぼろを出しそうになってはなんとか誤魔化しつつ、時間はゆっくりと過ぎていった。

なるべく二人で遊ばせているので何を話しているのかあまり聞いていなかったが、二人とも楽しそうに過ごしているので、私は安心して洗濯やら自分の部屋の掃除やら、宿題などを片付けていた。

そして、夕飯の仕込みでも始めようかとキッチンに立った時、桎とラウルがひょっこりとキッチンに現れた。

「姉ちゃん、ちょっと外に遊びに行ってきたもいいかな？」

「いいけど、もうすぐ日が暮れるよ？」

まだ暗くなるには時間があるが、今から遊びに行くには少々遅い気もする。

庭に出て遊んだりしていたので、今更外にいくとは思っていなかった。

不思議に思っただけを見つめると、その後ろでラウルが何か訴えるように私を見つめているのに気づく。

「？」

何が言いたいのかわからずにラウルを見つめ返したものの、すぐに桎が口を開いた。

「そんなに遅くならないから、ちょっと行ってくるね！いこ、朔夜くん」

「う、うむ」

桎に促され、何か言いたげに私を見つめながら玄関に歩いていくラウル。

なんだろうと思いつながら玄関で二人を見送り、考えるためにリビングに戻ると、少ししてラウルが庭に続く窓から現れた。

「ラウル？桎は？」

驚いて声をかけると、ラウルは眉根を寄せながら私の隣に腰をおろした。

「俺を探しておる」

「かくれんぼ？」

「そうではない。『ラウル』をさがしておるのだ」

「：ああ！そういうこと！」

柩にとってのラウルは、黒猫の事。

どうやら柩は、朝から姿の見えない黒猫を探しに外に出かけたようだった。

「どうも猫の俺が大好きらしくてな。まあ、猫になっても俺の魅力が隠しきれんのはわかっておったが、ずっと猫の俺を褒めおるのだ。だが、朝から姿が見えんで、だんだんと心配になったらしい。一緒に探してほしいと頼まれたのだ」

「全然心配してない私には、頼みづらかったのかな」

私はラウルが目に見える場所にいたので当然気にしていなかったのだが、柩にとってはラウルはちょっぴり勇敢な子猫。

朝から夕方まで一度も姿を見せない子猫を、勇敢だからこそどこかで怪我などしてないかと心配になったのかもしれない。

「猫の姿で迎えに行ってくる。サクヤはレンが急に迎えに来て帰ったとも言えよかろう？」

「いいけど：ラウルは、もう一緒に遊ばなくていいの？」

もとはといえば、ラウルが柩と子供同士で遊んでみたかったのだ。せっかく楽しそうに過ごしていたのに、予定より早く終わらせるのはもったいないような気もした。

「仕方ないであろう？ 兄が弟を心配させてどうする」

「いや、兄じゃないけどね」

「心配したままではマサキも楽しくなかうし、俺が猫の姿で遊んでやることにした。俺のほうが、大人だからな！」

どうやら、ラウルは柩に気を使ってくれているようだった。自分の身を案じてくれているのが、嬉しかったのかもしれない。

いつもなら寝るとき以外は猫の姿になるのを嫌がるくせに、私に口付けをして黒猫に戻るラウル。私を見上げて尻尾を揺らすと、走ってリビングの窓から外へ出て行った。

「さて、迎えに行くか」

互いに思いやる気持ちを嬉しく思いながら、私はそう言って立ち上がった。

蓮に予定変更のメールをしながら、私も柩を探しに外へでかける。そして、黒猫を嬉しそうに抱きしめている柩と、仕方がないのうとでも言ってそうな黒猫ラウルを見つけ、自然と微笑が浮かんだのだった。

黒猫王子と弟 8 (終)

「姉ちゃん。一人暮しなんだから、色々気をつけてね」

気がつけば、もう柗の帰る日になっていた。

柗がいた一週間は、後半は私は学校があったこともあって、あっというまに過ぎていた。

私の留守中も柗と黒猫はうまくやっていたようで、帰るといつも二人で仲良く出迎えてくれて、その日一緒にしたことを楽しそうに報告してくれた。

ラウルも、柗が賢い黒猫にベタ惚れで褒めてばかりだったので、悪い気はしなかったらしい。

柗の腕の中ですんなりと抱かれ、対抗心を燃やしたり、妬きもちをやることも少なかった。

「うん。ありがと、柗。柗も気をつけて帰ってね。お父さんとお母さんによろしく。あと、一緒に帰ってくれる会社の人にもちゃんとお礼を言うのよ？」

「うん。わかってるよ」

空港まで一緒に行くと言ったのだが、成田空港行きのバス乗り場まででいいと断られていた。

「ほんとに空港まで行かなくて大丈夫？」

心配になって尋ねる私に、笑顔で頷く柗。

「姉ちゃんよりも旅なれてるもん。心配ないって。バスから降りたら待ち合わせ場所に行くだけだしさ」

「ま、まあ、それはね」

否定できずに苦笑する私。

確かに空港まで行ったところで、迷うのは私のほうだろう。しっかり育ってくれて嬉しいやら、姉として情けないやらだ。

「ラウルも、姉ちゃんのことよろしくな！変な男にひっかからないように見張っててくれよな！」

「みい！」

柩の言葉に、私の腕の中で返事をするラウル。

任せておけというように尻尾を揺らしているが、ある意味ラウルも変な男だよなとこっそりと心の中でつつこむ。

とうか、小学生の弟にそんな心配をされる私ってどうなんだろう…。

そんな私の心の中の哀愁には気づかず、柩はラウルの頭を撫でながら私ににっこりと微笑んだ。

「一人暮らしで寂しい思いしてるかと思ったけど、ラウルがいてよかったよ。賢いし、勇気あるし、姉ちゃんの事心配して守ってくれるし、こんないい猫拾ってほんとよかったね！」

「うん。そうだね」

それは、心から同意できた。

拾った当初は突然降りかかった現実離れたファンタジーな王子様にどうしようかと思ったが、今となってはラウルがいてくれたおかげで家族と離れた生活でも寂しい思いをせずにいられるのだと感謝していた。

ラウルは褒められて気をよくしたのか、私の腕からするりと抜けると、ひょいっとジャンプして柩の肩に華麗に着地する。

そして、ぺしぺしと柩の頭を片手で叩いた。

おそらく『弟よ、よくわかっていないか』くらい言っているのだろう。

頬をなめたりしない辺りが猫と違ってラウルだよなあと、思わずくすつと笑う私。

そんな私の視界に、空港行きのバスがターミナルに入ってくるのが映った。

柩もバスに気づき、振り返ると、購入していたチケットを取り出した。

「んじゃ、姉ちゃん、ラウル。またね。蓮や桜子姉ちゃんにもよろしく！」

「うん。またね、桎。気をつけて帰ってね！」

「みい！」

荷物を肩にかけると、手を振ってバスに乗り込んでいく桎。

私の肩に飛び移ったラウルは、別れの挨拶をするかのように尻尾を左右にゆらゆらと振っている。

ややして出発するバス。

見えなくなるまで手を振って見送ると、急に寂しさがこみ上げてきた。

ラウルの事がばれないように気を使ったり、猫にしたままのラウルを申し訳なく思ったり、忙しない一週間でもあったが、やはり家族と離れるのは寂しいものだ。

ラウルがいてくれるが、弟と同じようで違う存在。

久しぶりの桎との生活が嬉しくて、それがまた当分ないと思うと、心の中に穴があいたような感じだった。

と、頬にざらりとした感触がし、私ははっと我に返る。

視線を横に向けると、私の頬をなめたラウルがみいっと小さく鳴いた。

どうやら、落ち込んだのがばれだっただけらしい。

「ありがと、ラウル」

慰めてくれたらしいラウルにお礼を言うと、私の肩からとんとと華麗に飛び降り、さっさと帰るぞといわんばかりに先頭を切って歩き出すラウル。

小さな黒猫のあとについて、私は寂しさをちよっぴり忘れて家に帰ったのだった。

そして…

「ヒナタアオイ！今日ははんばーぐを食べるぞ！」

家に帰って人の姿に戻したとたん、ラウルは開口一番そう言った。

「私はこの間食べたばっか…」

「それから、しゅーくりーむと俺の服も買いに行くぞ！」

私の発言には聞く耳持たず、有無を言わせぬ瞳で私を見つめるラウル。

柎と黒猫として友情を深めたラウルだったが、それとこれとは話が別らしい。

初日の恨みを忘れてはいなかったようだ。

「ふふふ。なに、心配するな。料理は俺が手伝ってやる。マサキより上手だと、思い知らせてやろう！！」

「えーと…」

「兄になる俺が、弟に劣ると思われては困るからな！！」

柎への対抗心がなかったように見えたのはどうやら幻だったらしい。

というか、柎のいる前では大人ぶりたかったただけなのだろうか。

私を見つめる緑色の瞳は、やる気に満ちてキラキラと輝いている。

「それから、今日は俺も人の姿で寝るからな。文句はあるまい」

「えー。ようやく狭いベッドから解放されると思ったのに？」

「何を言う！俺はずっと猫の姿だったのだぞ！しかも、寝るときはずっとマサキにヒナタアオイの隣をゆずっておったではないか！当然の権利であろう？」

「うーん…まーねえ…」

「それから、今日は髪も洗ってもらうからな！乾かすのもヒナタアオイだぞ！」

そう言って私の服をきゅっと掴み、じっと見上げるラウル。

無理に大人ぶっていたのと、柎に私を奪われていた反動か、ものすごく甘えたがっているようだ。

甘やかしすぎはよくないと思いつつ、渋い顔を保てずについつい笑ってしまう。

「何を笑うか！」

「いやいや、なんでもない。確かにラウルには榎がお世話になったからね。ちゃんとお礼するよ」

「うむ。それでよい！」

満足げに頷くラウルに、私は目を細めた。

榎が帰ってしまった寂しさは、もう薄れていた。

榎はそのうち一緒に暮らせるようになる。

だけど、この王子様とはいつまで一緒にいられるかわからない。

こんな風に、やきもちをやいたり、甘えてくれる事も永遠には続かないのだ。

今日の前にいるラウルとの時間を大切にしようと、そう思う。

「んじゃ、おつかいいこうか」

「うむ」

ラウルは嬉しそうに返事をする、お出かけ用に榎の服に着替えた。

そして、二人で手をつないで買い物にでかける。

「榎ともっと人の姿でも遊びたかった？」

「むう。そうだな。それはそれで楽しかっただろうな」

「結局、あんまり遊べなかったもんね。えーと…朔夜くん」

「ふふ。だが、短い時間でも俺の素晴らしさはしっかと伝わったぞ。マサキのやつ、猫の俺に『あんな綺麗な男の子見たことない』っておったのだ。なかなか見る目があるな！」

「あーはいはい。よかったねー」

「なんだ、その気持ちのこもらない返事は!!」

「あーはいはい」

「ヒナタアオイ!!」

榎がいる間は、あまり出来なかったラウルとの会話。

他愛のない会話だが、気のない表情とは裏腹に、私は楽しくてしようがないと心の中で微笑んだのだった。

黒猫王子と弟 8 (終) (後書き)

黒猫王子と弟 終

出会い ラウルVer.

「こんな複雑な魔法、いくら私でも解除できないかもしれないな」
そう言った父上の笑顔が、その時ばかりは悪魔の微笑に見えた。
あれから数日、俺はか弱い小さな子猫の姿で異世界を彷徨っていた。

「ふみゃあ…」

無理やり抱かれた腕から必死に逃走し、ようやく巨漢な女性の気配を感じなくなったところで、俺はため息をついた。

しかし、口から漏れるのは子猫の鳴き声…。

そろそろこの姿にも慣れてきたが、やはり人の姿の方がよい。

一刻も早くもとの姿に戻りたかったが、なかなかいい相手が見つからなかった。

猫になっても隠し切れない俺の愛らしさに惹かれ、声をかけてくるものは数知れない。

だが、いくら俺が女性に優しく心の広い男だったとしても、鼻水をたらしたお子様や、この小さな身体が埋もれそうなほどたぷたぷしたお腹のご婦人と真実の愛を見つけられる自信はない。

相手を惚れさせる自信はあるが、自分が愛する相手は選びたかった。

しかし……。

「みい…」

少し歩いたところでふらっとし、思わず小さな声をあげてその場にしゃがみこんだ。

この異世界に来てからろくな物を食べていないし、身体が休まる

ところで眠ることもできていない。

さすがの俺も、徐々に体力を失っていた。

魔法が使えればまだいいのだが、こちらの世界では魔法の元となるマナが少ないうえに、この身体では簡単な魔法すら発動できない。このままでは相手を見つける前に倒れそうだ。

力尽きれば、さすがに父上も助けてくれるだろう。

だが、それは悔しい。

たとえどんな無理難題だろうと、未来の国王としては与えられたものは自分の力で解決したかった。

「みゃう！（よし！）」

気合を入れて、すつくと立ち上がる。

しかし、そんな俺に無常にも冷たい雨が降り注ぎ始めた。

しかたなく、雨をしのげる場所を求めて歩き始める。

魔法を解いてもらう女性を探している間に、この辺りもだいぶ歩き回った。

せっかく母上の生まれ育った世界に來たのだからと、色々と観察もしている。

だから、なんとなく雨風がしのげる場所はわかっていた。

わかっていたのだが、たまっていた疲れと気温の低さ、そして雨に体温を奪われ、途中で身動きが取れなくなってしまった。

道の片隅にうずくまり身を震わせながら、徐々に意識が遠くなる。

このままだと、本当に危険かもしれない…。

そう、思ったときだった。

「君も一人なの？」

寂しそうな声が、俺の耳に入った。

『君も』という事は、声の持ち主も一人なのかと、朦朧とした意

識の中で思う。

「大丈夫？」

気遣う声が聞こえたかと思うと、冷たい手が俺を包んだ。

そして、そのまま声の持ち主に抱きしめられる。

俺と同じように、冷え切った体。

だが、声の持ち主は俺を温めようとしてか、優しくその背を撫でてくれた。

ふわりといい香りがする。

心地よい、匂い。

まるで母上のようなと思った。

思わず、力の入らぬ手で彼女の服にそっとしがみつく。

そしてうつすらと目を開けて彼女を仰ぎ見ると、寂しそうな瞳に出会った。

今にも壊れそうな、悲しみに満ちた瞳。

レンと同じ年頃の女子だった。

残った力を振り絞れば、逃げ出すことも出来るだろう。

だが、今にも消えてしまいそうな自分よりも、こんな俺を心配している彼女を、俺は放っておく事ができなかった。

「一緒にいこ」

「いやあ（仕方がない、一緒に行つてやろう）」

寂しそうな微笑みを浮かべて俺にそう声をかけた彼女に答えたが、猫語では意味は通じなかっただろう。

だが、彼女は了承を得たと感じたらしく、今度は嬉しそうな笑みを浮かべると、俺を腕に抱きながらゆっくりと歩き出したのだった。

「ここが私のうちだよ」

彼女はそう言うと、小さな家の中に俺を連れ込んだ。

それから自分より先に俺をタオルで包み込み、優しく全身を拭いてくれた。

そして俺をタオルに包んだままばたばたと動き回ると、少しして俺の目の前に皿を置いた。

よい香りが、ぼうっとした俺にもそれが食物だと教えてくれる。もそもそと温かったタオルを抜け出して、皿の前に立つ。

皿の中にあっただのは、白い液体。

それは、どう見ても皿に注がれたミルクだった。

ラストイーダ王国の王子である俺に、コップではなく皿に注がれたミルクを飲めというのか…。

そう思って目の前に座る彼女を見上げると、無邪気な微笑を返された。

そして、温まった彼女の手が俺の頭をそつと撫でる。

「どうぞ、黒猫さん」

「にゃー（仕方がない…）」

人の好意を無にするものではない。

それに、先ほどよりもいい笑顔を浮かべた彼女を、再び悲しそうな顔にさせては男が廢る。

俺は意を決すると、皿に注がれたミルクに口をつけた。

だが、思いのほかに美味い。

相当空腹だったのか、この姿だと味覚が違うのかわからないが、気がつけばどんどん皿の中身は減っていった。

「美味しい？」

「みゃー（まーまーだな）」

そう答えると、彼女は再び嬉しそうに微笑み、俺の頭を優しく撫でた。

それから、彼女は俺と共に風呂に入ると、すぐに俺を抱いてベッドへ連れて行った。

「名前は、明日考えようね」

お前が考えなくとも、ラウルという立派な名前がある。

そう言う前に、彼女は俺を柔らかな胸に抱いたままベッドに横になった。

そして、すぐに目をつぶる。

「おやすみ」

「にゃー（うむ。ゆっくり休めよ）」

彼女も疲れがたまっていたのか、おやすみの言葉の最中で半ば眠りに落ちているようだった。

目を閉じ意識が遠のいているような状態で、俺を引き寄せるとその唇をそっと俺の額に押し当てる。

俺を、人の姿に戻すためのキス。

身体が光に包み込まれると共に、俺は人の姿に戻った。

だが、彼女は既に眠りに落ちていたらしく、それに気づいた様子もない。

すやすやと眠る彼女を、俺はそっと抱きしめた。

自分も壊れそうな瞳をしていたのに、俺を助けようとしてくれた彼女。

見た目も十分合格点だし、この娘ならば、愛せるような気がした。

「何があつたか知らぬが、ゆっくり休め。俺が、傍にいてやろう」

眠る彼女にそう言いながら、長い髪をそつと撫でる。

少し微笑んだように見えた彼女の寝顔を見ているうちに、俺もいつの間にか眠りに落ちたのだった…。

END

私の王子様

「ほら、行くぞ。ヒナタアオイ」

そう言って差し伸べられた手を、私はそっと握りしめた。

小さかった手は、いつのまにか男らしく大きく成長していた。

しみじみと成長期はすごいと思う。

お子様だったラウルはいつのまにか私の身長をあっさりぬかし、あどけなかったお子様は無駄にフェロモンの多い少年へと変わっていた。

見た目は全然成長のない私とは大違いだ。

「行くってどこ行くの？」

「うむ、そうだな…。大人のデートと言えどこに行くものなのだろうか？」

「大人のって…ラウルはまだ子供じゃない」

私の言葉に、むっとするラウル。

十五歳とは思えない色気を醸し出しているが、そんな表情はまだ子供らしさが残っていた。

「何を言う。俺はもう十分大人ではないか」

「そう？自分で大人って言ううちは、まだまだ子供だと思うけど」

「むう…」

「ほら、そんなところがまだこど…のわっ!？」

ふてくされたラウルの横顔を見てくすくす笑っていた私は、突如足がひっぱられて転びそうになり、ラウルの引き締まった腕にすがりついた。

足下を見ると、マンホールの蓋の穴にピンヒールがしっかりとハマっている。

「何をしておるのだ」

「ヒールが見事にはまったみたい」

「む?」

私をきちんと立たせた後、その場にしゃがみ込むラウル。

マンホールにつかまったサンダルを見ると、私を見上げてくすつと笑う。

「相変わらずどこか抜けているヒナタアオイの方が子供ではないか？」

「これは大人とか子供とか関係ないでしょ。っていうか、相変わらずずってなに！？」

「とりあえず、肩につかまっている」

私の抗議をさらりとながすと、私のサンダルを優しく脱がせ、それから穴にはまったヒールをひっこぬきにかかるラウル。

その間、通り過ぎていく人々が、稀にみる美少年を跪かせている私に注目していくことが恥ずかしくてたまらなかった。

ただでさえ、お子様ではなくなったラウルと一緒に歩くのはもの凄く目立つ。

通り過ぎる女性の視線がラウルに集中する程、年齢を重ねる事にラウルはいい男に育っていた。

「とれたぞ、ヒナタアオイ。履かせてやるから、足を出せ」

「え、いいよ。自分で履くから」

「遠慮することもないであろう？」

艶のある笑みを浮かべるラウルに思わずどきっとしつつ、素直にあげていた足を降ろす私。

ラウルは長い指で私にそっとサンダルを履かせてくれた。

その優雅な仕草に、道行く女性達が足を止め、ほうっと感嘆の息をもらしている。

「ラウル：王子様みたい」

おとぎばなしのお姫様になったように思わず眩くと、立ち上がりながらにっこり笑うラウル。

「みたいではなく、本物の王子様だぞ」

「まあ、そうんだけど…」

知ってはいるが、お子様の頃とは違い、本当にだんだんと気品な

ども見え隠れしはじめ、正直たまに本気でみとれてしまう。

本当に、見た目も中身もどんどん成長しているって、いるラウル。

それが嬉しくも、遠い人になっていっているようで寂しくもあった。

「なんだ、ヒナタアオイ？」

「え？ いや、何でもない」

寂しそうな顔を出してしまったのか、ラウルはのぞき込むように私を見つめていた。

「本当に、何でもないのか？」

「う、うん」

大学生が十五歳に見つめられてドキドキするのはどうかと思いつつ、ラウルに真っ直ぐに見つめられて思わず鼓動が早くなる私。相変わらず見た目に弱いのは本当にどうかと思う。

「ふむ。元気がないなら元気づけようと思ったのだが……」

「元気づけるって？」

ドキドキしてるのを隠し、平然と尋ねると、柔らかに目を細めるラウル。

そして、長い指が私の顎をくいとあげた。

「へ？」

「元気の出るおまじないだ」

そう言っつて、ラウルの綺麗な顔がすうっと近づく。

「ちよっ！！！？？？」

白昼堂々、人前で何をっ！？と、焦る私。

だが、魔法にかけられたかのように動くことが出来ず、顔を赤らめながら反射的に目をつぶった時だった。

ぼんっ！！！

「ふえ？」

近くで大きな音が聞こえ、間の抜けた声をあげ、目を開く私。

その目に映ったのは、いつも通りのリビングだった。

一瞬何がおこったかわからなかったが、ゆるゆると思考回路が働きたし、状況を認識する。

今日は休日で、午前中に掃除やら洗濯やら一通り家事を済ませた後、ソファで休んでいるうちに寝てしまったらしい。

「な…なんて夢を…」

自分の見ていた夢を思い出し、かあっと顔が熱くなる。

よりによって、成長したラウルにキスを迫られる夢を見るなんて…。

「って、何の音？」

我に返り、一人呟く私。

ある意味危険な夢の世界から現実に戻したのは、大きな音だった。

家の外ではなかったようだし、となると、音を出した犯人はラウルしかない。

私は立ち上がると、ラウルを探しにリビングを出た。

そして、キッチンで硬直しているラウルを発見する。

「どうしたの、ラウル？」

「ひ、ヒナタアオイ。卵とは爆弾だったのかっ!？」

「意味不明なんだけど」

硬直したまま訳の分からない言葉を叫んだラウルに眉をひそめた私だったが、ラウルの視線の先をみて、その意味がわかった。

電子レンジの中の様子が、なんだかおかしい。

嫌な予感がしながら電子レンジの扉をおそるおそる開けると、既に原形をとどめず、四方八方に飛び散った残骸があった。

「ラウル…。まさか、卵をレンジにかけた？」

「うむ。手っ取り早くゆでたまごが出来ると思ったのだが、爆弾ができあがったようだ」

よほど驚いたのか、まだ固まったままのラウル。

私は夢の中の大人っぽいラウルと現実のラウルのギャップに内心笑いつつ、エプロンをつけている王子様を見つめた。

「電子レンジで卵を温めるとこうなるの。一つ勉強になった？」

「何故だ。この箱は物を温める物であろう？ 卵は殻ごと温めたらゆで卵になるはずなのに、どうして爆発するのだ」

「いや、詳しい仕組みは私にもわからないけど、お湯で温めるのは違うのよ。だから、今度からは絶対に禁止ね」

「むう…」

納得いかないと言うように電子レンジを睨むラウル。

「せっかくヒナタアオイが起きる前にと考えたのに、箱の分際で邪魔をしておって…」

「？」

ぶつぶつとレンジに向かって文句を言い始めたラウルを見て、私はようやくラウルが何をしようとしていたのか確認した。

エプロンをつけ、ゆで卵を作ろうとしており、そしてまな板の上には切ったハムやトマトらやキュウリやら。

小鉢にはマヨネーズであえたツナがあり、その隣に食パンが置かれている。

どうやら、サンドウィッチを作ろうとしていたらしい。

私が一緒の時以外は火を使わないように言っているので、卵サンドを作るのに電子レンジを使ったのだろう。

「ラウル、お昼ご飯つくろうとしてくれたの？」

「うむ。ヒナタアオイが疲れておったようだから、俺がつくって驚かせようと思ったのだ。それなのに、卵が驚かせおって…」

恨めしげに粉碎した卵を睨むラウルに、私は思わず笑ってしまった。

「何を笑うか!!」

「いやいや、ラウルは可愛いなーと」

「男が可愛いと言われても嬉しくないぞ！」

予定が狂い、すっかりご機嫌斜めの王子様。

だが、それも私を氣遣い、喜ばせようとしてくれた結果だと言うと、やはり可愛いとしか言いようがなかった。

電子レンジの後片づけは少々面倒だったが、ラウルの気持ちを考えたらずではない。

「ありがと、ラウル。気持ちだけで十分嬉しいよ」

夢とは違いまだ腕の中におさまるラウルを、私はきゅっと抱きしめた。

優雅で色気のある王子様なラウルもいいが、やっぱり今のラウルが今の私にはあっている気がした。

我が道を行くようで、ちょっと不器用で優しい小さな王子様。

つつこみどころも満載だが、こうやってほっこり心を温める事をしてくれる。

「片づけも、サンドウィッチ作りも一緒にやるっか？」

「いや、ここまでやったら最後まで一人でやるのが男であろう？ ヒナタアオイは向こうでまっておれ」

「いやでも、ラウルに任せたら電子レンジが綺麗になるとは思えないし？」

「何を言うか！ 俺に出来ぬ事はない！！」

「ゆで卵つくれなかったし」

「それは、ヒナタアオイが火を使うなというからであろう」

ラウルと軽口をたたきながら、結局二人でお昼ご飯を作り始める。

いつか…というより、数年後には確実に夢の中のように大人っぽく成長するだろうラウル。

こんな風は無邪気に過ごせる今を大切にしたいと思いながら、私はラウルとの料理を楽しんだのだった。

もう少し、このままで…

日が当たり心地の良い屋根の上でうとうと眠りに落ちていた黒猫は、自分と呼ぶ声がした気がして耳をぴくりと動かしした。

ゆっくりと目を開けると、今度ははっきりと自分の名が聞こえる。「ラウル、おやつ買ってきたよー！どこー？」

待ち人の帰宅に思わず尻尾を上下にゆっくりと振りながら立ち上がると、軽やかに声のする方へと降りていった。

「みゃー！」

ここにいるぞと言ったつもりでも、この姿だとただの動物の鳴き声にしかない。

さらには何の力も使えない上に、女性や子供にまで軽々と持ち上げられてしまうこの姿。

それはとても屈辱的な事だったのだが…。

「あっ！ただいま、ラウル」

そう言って優しく抱き上げられ、そっと撫でられる事はとても心地よかった。

この小さな身体全体が、彼女の温かさに包まれる。

それはまるで、幼子が母親に抱かれている時のような安心感。

この時だけは、この姿も悪くないと思っていた。

そんな心地よさに目を閉じていると、柔らかな唇がそっと額に触れ、身体が変化する。

目を開いた時には、少しかがんだ彼女の笑顔が目の前にあった。

ふわりと、心の中に温かな物が宿る。

彼女がそばにいる時は、いつも胸にその心地の良い灯りが燈っていた。

「あのね、遅くなったお詫びに新作ケーキ買ってきたの！」
「ほう、それは楽しみだな」

「でしょ！絶対美味しいよ！」

「うむ。それでは、俺が茶を淹れてやろう」

「ありがと、ラウル！」

無邪気に笑う彼女につられ、思わず浮かぶ笑み。

城にいたとき、こんな自然に笑えたことがあっただろうか。

常に人に囲まれ、身の回りのことも全て侍女たちが行い、何不自由なく過ごしていた城での生活。

多くの者が自分を慕い、尽くしてくれていた。

その者たちに、笑顔を向けていたのも事実だ。

だが、何かが違った。

ここは自分の事は自分でやらねばならないし、彼女の小言も多い。自分の意に反して猫の姿にはなるし、魔法の使い勝手も悪い。

城にいるよりも不便な事が多いのだが、ここにいるほうが何故か心が安らぐのだ。

自分を慕い、笑顔で世話をしてくれるものたちよりも、叱ってばかりの彼女の方がいい。

それが何故なのか、ここで過ごすうちになんとなく気付き始めていた。

「ラウル、紅茶いれるの上手になったね！」

自分が用意してあげた紅茶を口にした彼女は、にっこりと微笑んだ。

「当然であろう。俺に出来ぬことなどない。以前はやり方を知らなかったただけだ」

「そうだね」

自分の言葉に、くすくすと笑う彼女。

きっと、最初の頃を思い出しているのだろう。

お湯の出し方もわからず、茶葉の量も知らず、簡単に見えた作業の後にはびしょびしょになったテーブルと、やたら苦い紅茶。

それが悔しくて、何度も練習したのだ。

「ラウルって、意外と努力家だもんね」

「そんな事はない。努力というほどの事はしておらんぞ。そんな事せずとも俺はできる！」

「はいはい」

軽く流すような彼女の言葉にふくれつつも、彼女が買ってきてくれたケーキを口に運ぶ。

自分の好みを熟知した彼女が選んだケーキは、程よい甘さにとろけるような口どけが最高だった。

彼女と過ごす穏やかな時間。

それは、彼女が自分をただ一人の少年としてみてくれているから。その事が少々悔しくもあるが、心を解放させてくれていると、だんだんと気付き始めていた。

城の中では、皆が王子としての自分を見ている。

この国の未来を担うものとして。

期待する視線の中に、冷たい物が混じっているのも知っている。

自分は、王である父のようにならなくてはいけない。

誰よりも強く、誰よりも華やかで、誰よりも自信に満ち、誰よりも賢く、誰よりも国民に愛される存在。

歴代の王の中でもずば抜けて魔力も高く、カリスマ性も備えた父に近づかなければならない。

それが、国民の自分に対する期待。

弱さを見せてはいけない。

無様な姿などさらしてはいけない。

努力などせずとも、才能で何事も人より優れていなければならな

い。

誰から言われずとも、それに気付くくらいの才は受け継いでいた。だから、無意識のうちに父を真似ていた。周りの者の期待に応えなければいけない。

それが、王子として生まれたものの使命・・・。

だけど・・・。

「ほら、ラウル。もうお風呂の時間だよ！」

「わかっておる。だが、セーブポイントまであと少しなのだ」

「私がお風呂から出るまでに終わらせとけて言ったでしょ!!」

「そうは言っても、敵がなかなか強くてだな」

「もー…」

怒ったように半眼で睨みながら隣に座った彼女からは、良い香りが漂っている。

文句を言っているわりに、彼女を包む空気は柔らかだ。

笑顔のわりに冷ややかなオーラをまとっている向こうの人間とは対照的だった。

彼女は、自分に何も求めていない。

叱る事は多々あるが、それは全て自分の成長につながるもの。

自分の為を思い、怒ってくれているだけだ。

王子だからなど、異世界の住人の彼女には何も関係ないらしい。掃除をしようとして逆に散らかしても、料理をしようとして食べ物黒焦げにしても、彼女は自分を見放したりしない。

呆れた眼差しをしたとしても、失望はしない。

自分でも認めたくない己のダメなところも、彼女は受け入れてく

れる。

だから、彼女の傍は心地がいいのだ。

道端で拾った、彼女には何のメリットもないはずの自分を、放り出さずに面倒を見続けてくれる彼女の優しさが、今まで知らなかった本当の安らぎを与えてくれていた。

「いや、メリットはあるか…。俺ほど美しければ、目と心の保養になるしな」

シャワーを浴びながら、自分自身にそう突っ込みを入れる。

出会ったときには物凄く悲しげな瞳をしていた彼女も、今ではすっかり元気だ。

それは、絶対に自分のおかげに違いない。

肩書きなど関係なく、自分の存在が彼女を癒したのだと、ちよつと嬉しくなる。

「いや、当然の結果か？」

再び一人でそう納得すると、風呂場を出た。

髪を拭きながらリビングに向かうと、ソファの上に横になった彼女の姿。

すやすやと気持ちよさそうに寝息をたてている。

「まったく：風邪を引くではないか」

普段は自分に注意する側の彼女だが、今日は疲れていたのか、待っている間に彼女の方が眠ってしまったらしい。

その安らかな寝顔を、じっと見つめる。

この生活が、いつまで続くのだろうか…。

最初は黒猫の姿になるのが嫌で、一刻も早く終わらせたかったこの生活。

だが、今は違う。

今も猫の姿になるのは屈辱的だと思うが、それで彼女のそばにいられるならと思うと、心が揺れる。

彼女とならば、真実の愛を見つけられるだろう。

惚れさせる自信はある。

しかし、魔法が解けてしまったら、城に戻らねばならない。

彼女を連れて城に戻ったとしても、ここでの生活とは違うものになるだろう。

二人きりのこの心地よい生活は、魔法が解けるまでだ。

「：仕方がないやつだのう」

起きる気配のない彼女の頬に、そっと口づけをする。

それでもすやすやと寝ている彼女に小さく嘆息し、それから指先で魔方阵を描いた。

悔しいが、この細腕では彼女を安全に二階の寝室まで運べない。

風の魔法の力を借りて彼女を抱き上げ、彼女の部屋のベッドまで運んだ。

すっかり熟睡している彼女を起こさぬよう、そっと横たわせ、布団をかける。

それから、彼女の唇にそっと触れた。

その瞬間に身体は光に包まれ、猫の姿へと変化する。

それから、布団の中にもぞもぞと入り、彼女の腕の中に納まった。心地の良い温もりの中、目を閉じる。

この時が永遠に続けばいい。

終わりが来ることを知りながらも、ついそう願ってしまう。

ヒナタアオイ…

大切な人の名を心の中で呼びながら、いつの間にか眠りにつく。

もう少し、この優しい時が続くようにと、心から願いながら……。

七夕の願い

七月七日、夕方…。

お店で買ってきた小さな笹に、私は折り紙で作った飾りをつけていた。私の後ろには、リビングのソファで腕組みをし、前のテーブルにおかれた短冊をにらみつけながら座っているラウルの姿。

しばらく前からずっと同じ姿勢だった。

「ラウル…まだ決まらないの？」

「むう…。願い事を一つに絞るといいうのは難しいものだな」

呆れた声の私に、真剣な顔で答えるラウル。

私は思わず笑ってしまう。

「何を笑う！」

「だって、そこまで真剣に悩むとは思わなくて」

「願い事が一つ叶うのだぞ？何を願うか悩むに決まっているではないか！」

私が説明した七夕の話を、ラウルは素直に信じてくれたらしい。本来は手習いや技芸の上達を祈るものらしいが、願いが叶うという方が夢があるかと思いい、ラウルには短冊に願い事を一つ書くように言っていた。

昨日は織姫と彦星のためにてるてるぼうずを作って晴天を願い、今は一生懸命願い事を考えている。

大人びていても、こんな時はまだ可愛いお子様だった。

「仕方ない…やはり、今はこれだな」

ラウルはようやく心を決めたのか、短冊の上にペンを走らせた。
悩んだ割には予想通りの願いに、思わず微笑んでしまう。

「『早く元の姿に戻らせろ』って、命令形で願い事書くもんじゃないわよ?」

「いいではないか。その方がききそうであろう?」

「そうかもしれないけど」

きらきらと目を輝かせてるラウルを目にし、ラウルが楽しそうならなんでもいいかと思いながら、私はその短冊をラウルが笹に飾り付けるのを手伝おうと立ち上がった。

が、眩暈がし、そのまま座り込む。

「ヒナタアオイ!?!」

「あー、ごめん。大丈夫。ただの立ちくらみ」

心配そうに名前を呼んだラウルに笑顔を向けると、ほっとしたように私を見つめるラウル。

それから手をとって立ち上がらせてくれたラウルは、自分で短冊を飾りつけ、満足げに微笑んだ。

「よし、これで明日から俺は元の姿だな!」

「だといいね」

明日の朝、自分が猫の姿のままだったらふてくされるかもしれないと思いつつ、うきうきしたラウルと夕飯を食べ、機嫌よく猫の姿になったラウルと共に、私は眠りについたのだった。

そして、深夜…。

「ミャー？」

耳元で小さくない黒猫の声に、私は目を覚ました。

なんだか身体が熱く、だるい。

ゆっくりと目を開くと、緑色の瞳が心配そうに私を見つめていた。

「ラウ…ル…？」

なんとなく息苦しさを感じながら名前を呼ぶと、黒猫ラウルはいつもと違い、そっと私の唇に自分の額を押し当てた。

光と共に、人の姿へ戻るラウル。

「大丈夫か、ヒナタアオイ？」

私の様子がおかしいことに気づき、目を覚ましたのだろう。

開口一番にそうたずねた。

「う…ん…」

私がぼうつとしながら答えると、ラウルは眉を顰める。

私の額にその小さな手をのせ、はっと目を見開いた。

「やっぱり熱いではないか！ちょっと待っておれ！！」

そう言うと、ラウルはベッドを抜け出し、ぱたぱたと階下へ降りていった。がたがたと何かを探す音、水音が聞こえる。

おそらく、以前熱を出した時のように、タオルで冷やしてくれるつもりなのだろう。

少しして、前回でちゃんと学習したのか、きちんと絞ったタオルをラウルは私の額の上に乗せてくれた。

「これで、少しは楽になるか？」

「うん：ありがと。気持ちいいよ」

「薬を飲むか？どこにある？」

「大丈夫：。このまま休めばきっと平気」

「本当か？必要なことがあれば、ちゃんと言うのだぞ」

「うん：ありがと」

心配そうなラウルに微笑むと、ラウルは微笑を浮かべながら私の手を優しく握った。

「では、安心して眠れ。俺がついているから大丈夫だ」

「うん」

ラウルの優しい声に、私はまた眠りに落ちた。

気のせいかな、ラウルのおかげか、息苦しさは少し楽になっていた。

そして、朝。

日差しの温かさに、私は目を覚ました。

ゆっくりと起き上がると、夜の苦しさは嘘のようになくなっていた。

隣を見れば、私の手を握ったままベッドに寄りかかって寝ているラウルの姿。

夜中に冷やしたタオルを何度か新しいものに変えてくれたのだらう。

数枚のタオルが床に落ちていた。

「ありがと、ラウル」

私は微笑むと、眠っているラウルを抱き上げてベッドに横にした。それから、寝ているラウルを起こさないよう、汗でぬれたパジャマを着替え、そっと階下へ降りていった。

予想通り慌てていたラウルのおかげで物が散乱していた洗面所を片付け、私は一息つきにリビングへ入る。

そして、笹飾りを目にし、動きを止めた。

昨日と違う短冊が、そこには飾られていた。

「本当に願いが叶うのだな」

背後から眠そうな声が聞こえ、はっと我に返る。

振り向くと、とろんとした目つきのラウルがたっていた。

「元氣になってよかったな」

そう言ってあくびをかみ殺して微笑んだラウルを、私は思わず抱きしめていた。

「どうした、ヒナタアオイ？」

「早く元の姿に戻りたいんじゃないなかったの？」

「それはそうだが、それは自分自身の力でもできることだからな。それよりも、短冊を変えるのが間に合ってよかった。星が出たあとだからダメかと思ったぞ」

リビングのテーブルの上には、昨日書いたラウルの短冊がはずされておいてあった。

そして、笹に飾られていたのは、ラウルの新たな願い。

『ヒナタアオイを元氣してください』

きつと、夜中に書きかえたのだろう。

自分の為の願い事は命令口調だったのに、私のためには丁寧な言葉の願い。

それだけ、真摯に願いを込めてくれたに違いない。

愛しさがこみあげる。

「ありがとう、ラウル」

「礼にはおよぼん。願いを叶えてくれたのは、織姫と彦星であろう？ 昨日は天気がよく二人が会えたから、機嫌よく願いをきいてくれたのかもしれない」

そう言って無邪気な笑顔を見せたラウルを、私は再びぎゅっと抱きしめたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6446/>

ペットな王子様 番外編集

2010年10月13日18時34分発行